

ダンまちの世界にサトウ・ファミリアが来る

黒猫うたまる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サトウーといつものメンバーがダンまちの世界に飛ばされてしまう。サトウー達はどうなるのか？

駄文ですが宜しければどうぞ。作者は国語力皆無です。

打たれ弱いメンタルの持ち主です。

みんな優しくお願いします

目次

プロローグ	1
異世界へ	11
迷宮へ	17
この世界は	23
本格始動前	29
その名は：	34

プロローグ

「ポチ、タマ行きますよ」

「あいあい〜」

「らじやなのです!」

お、連携技かな。

「一の太刀なのです! ヴァーバルランス 魔刃突貫!」

ポチが全身を真っ赤に光らせながら瞬動付きで突撃していく。

「二の太刀く? バンキツシュ・ファンク 魔刃双牙」

タマが両手の小剣から巨大な牙のような刃を産み出す。それを手にコマのように体を回転させながら、交互に剣を突き立て噛み跡のような傷を穿っていく。

「三の太刀。 ドラグ・バスター 魔槍竜追撃!」

最後にリザが魔槍の連撃を叩き込む。ひとときわ激しい一撃を叩き込み真上に跳ね上た。握りしめた魔槍が今日一番の輝きを灯す。

「絶の太刀。 魔刃爆裂!」

激しい光とともに魔槍から放たれた光線が敵に向かっていき、見事に命中させ頭を吹き飛ばす。

リザたち獣娘達が攻撃を叩きこんでいる向こう側では、姉妹二人組もまた別の敵を相手している。

「突っ込むしか能が無いものは、滅びればいいと告げます！」

相変わらずの毒舌で敵を引き付けるナナ。敵の突進を大楯で受け止め動きを止める。

「■■■■、■■土流の巨蛇」

そこにすかさずミーアの土蛇が絡み付き、動きを完全に止める。だが敵も拘束から逃れようともがいている。

「■■■■、■■空間固定」

アリサの空間魔法が土蛇と拘束している敵ごと固定する。うまいな、レジストされないように土蛇に魔法かけたな。今日の止めはルルか。銃を構えたルルに目を向ける。

「標準固定、ファイヤ！」

銃口から発射された閃光が敵を貫通する。いつ見てもなかなかの威力だな。

これで全ての敵の殲滅終了。これぐらいの敵でも問題なく倒せるようになったな。解体する皆を眺めながら、成長した娘を想う父親の気分だ。

今日は皆と迷宮に潜りレベル上げだ。それが目的なんだけど、獣娘たちは半分は肉目当てだとみた。今も倒した獲物から肉の解体をして積み上げている。タマ、ポチは笑顔で解体しているのはいいんだけど。リザ、目が真剣すぎる。戦闘している時と同じ顔なんだけど、どれだけ本気なのがわかるな。そんなに食べたいんだね、肉。

アリサ、ミーアは先程の戦闘での意見を出し合っている。あ、違うか。喋っているのはアリサばかりで、ミーアは相変わらず口数少なく

首肯したりしている。

ルルは早速料理の準備を始めていてナナはその手伝いだ。さてオレも手伝いに向かうか。

手を振るポチに振り替えしながらルルの元に向かった。

新しい獲物なので、今日はオレが主体で料理を進める。鳥っぽい獲物「怪鳥ゲド」は、オリジナル魔法の「料理・消毒」で殺菌をし表面を強火で炙りタタキのようにする。ソースには甘酸っぱく調整したルルの実を使い、残りの肉は串に挿す。もう一つ獲物「突獣サイ」も一緒に串に挿し網で焼いていく。こちらはシンプルに香辛料を軽くかけて仕上げる。

料理を進めていく間獣娘三人は目を輝せながら見守っている。もう少しで出きるからねー。ポチとタマはヨダレを拭こうね。リザ、一杯あるからどれが大きいか品定めは止めなさい。

ミーア用に湯がいた肉と野菜で作ったサラダ、色とりどりのフルーツを用意して終了だ。

「いただきます」

『いただきます！』なのです！」

あいさつが終わるやいなやすごい早さで食べ始める皆。今日は控えめなルルでさえ何時もより早く食べている。

ミーアも小さい口を懸命に動かして黙々食べている。

「焼き鳥美味い！タタキも最高！お酒が飲めたら最強なのに！」

「うまうまで最強なのです！」 チラチラ

「ビミ〜？」 チラチラ

「とても美味です。歯ごたえがいまいちですが噛めば噛むほどに旨味が溢れてきます」 チラチラ

アリサ飲ませないからね。

三人はまだまだ一杯あるからゆっくりお食べ。まずは手に持って

いる串を味わいなさい。

目の前の串肉を食べながらも視線は俺の後方に目がいつている。オレの後ろでは巨大な塊が焼かれている。

「理力の手」でゆっくり回りながら焼かれているのは「突獣サイ」の骨付きも肉である。姿はまさにマンガ肉である。

足りなさそうなので焼いていたのだが、三人の視線が熱い。今も串肉を食べるのに目がキラキラ輝いている。焼けた肉を三人の皿にのせてあげる。

「大きくてすつごく美味しいのです！」

「うまうま〜？」

「これは菌ごたえがありとてもいいですね。噛み締めるごとに肉汁が溢れだしとても美味です」

かなりの大ききがある、肉の塊が無くなっていくのはすごい光景だな。確かに始めて食べたけどなかなか美味しいな。そんな楽しい時間がゆつくりと過ぎていった。

今俺たちがいるのは迷宮の中でも始めて行く区画だ。下層の一つでどうやら最近になってできた区画みたいだ。なぜ分かったかという、こちら辺のマップピングは終わっており、マップに空白区間が出ていたためだ。

知らべた結果、下層の中でも比較的攻略しやすそうなのでパワーレベリングと新たな素材（食材）のために少し遠出してみた。

そのお陰でみんなもレベルがかなり上がり満足しているみたいだ。今後の為にもみんなのステータスをメモして記録しておく。

素材（食材）のほうもなかなかの量が入り満足である。

休憩も終わり探索を続けしばらく進んでいると少し開けた部屋に出た。ここいら一带は光苔や光草など光源には困らない。

どうやらここはセーフエリアのような場所らしく危険な魔物の姿は見当たらない。中央には小さいが池もあり湧水なのかすごい透明

度だ。ざっと見渡しただけでも貴重な動植物が数多く生息しているみたいだ。

「わあ、すごいわねこれは」

「んっ」コクコク

アリサ、ミーアが周りを見渡しながら感想をのべる。

他の子達も周りを見渡しはしゃいでいる。

「少しここで採集しようか」

はしゃぐみんなに微笑みながらオレは提案してみる。

「了く解」

「んっ」コク

「マスターの命令を受諾」

「わかりました」

「らじやなのです」シユタツ

「あい」シユタツ

「承知しました」

みんなも賛成なようだし手分けして採集に取りかかる。鑑定やAR表記を見ながら進めているとタマが近づいて来た。

「どうしたんだい、タマ？」

「何かへんく？」コテツ

首を傾げながら今来た先を指差すタマ。はて？どうしたんだろう。

「何が変なんだい？」

「壁がへんく？」コテツ

反対側に首を傾げながら教えてくれた。壁か、少し調べてみるか。だいたいみんなも取り終わっただろうと考えタマにつげる。

「分かった調べてみるよ。タマはみんなに声を掛けてきてくれ」

「あいっ！」シユタツ

シユタツのポーズから駆け出すタマ。タマを見送り、指差していた方に向かいながらマップで調べるが何も無い。はて？と思いつつも壁に到着する。

「んー、特に変わった所は……?ん?」

と、一ヶ所に目が止まる。じーと見つめてもただの壁なのだが違和感がある。そこまで考えているとみんなも集まって来たようだ。

「どうしたの?ご主人様?何か壁にあるの?」

アリサが問いかけてくるので一旦みんなの方を向く。

「いや、タマが何か壁が変だと教えてくれたんで、覗いていたんだが」

また、壁に視線を向ける。みんなも視線をたどり壁を観るが直ぐに首を傾げる。タマも傾げているが意味合いが違うようだ。

「やつぱりへん?」

「?変なのです?」

ポチはタマに顔を向け聞いている。変だけど何がどう変なのか分からずタマも難しい顔をする。

オレもタマと同じだ。何かは分からないが確かにおかしいと感じる。

「タマ、壁に触ったかい?」

壁を見つめながら問いかける。

「さわってない」

その言葉を聞き少し思案する。危機感や罨サーチが発動しないのなら危険はないと思うがどうする?

そこでメニューを操作してレーダーやAR表記などを全て消す。クリアになった視界で問題の壁をもう一度みつめる。

集中していく。周りから音が消えていく。全てを見透す用に。ただ一点を見つめる。

ゆらりと壁が揺れた用に見えた。壁の向こうを隠すかの用に何かがある。

無意識に体が動いていたようで壁近くまで来ていた。警戒しながらも手を伸ばし触れてみる。

壁に手が触れた瞬間だった。霧が晴れるかの用にスーと壁が消えてしまった。これにはオレもびつくりである。

後ろでも息を飲む音が聴こえる。

息を吐き緊張を和らげる。

壁の向こうは道になっており暗い闇が続いている。そこまで観察してみんなに向き直る。

「道があるみたいだけど、どうでしょうか？」

「何なのいったい!?!いきなり道ができたけど!?!」

アリサ落ち着け。詰め寄ってくるアリサを宥める。ポチ、タマも落ち着け。今にも突撃しそうな二人はリザにまかせる。両脇に抱えられながらも尻尾は興奮してか激しく動き回っている。

「とりあえずみんな落ち着いて」

みんなに声を掛けながら一旦落ち着かせる。しばらくすると落ち着きを取り戻し今後のことを話し合う。

「落ち着いたところで改めて聞くよ、どうでしょうか？」

「はいはいっ!進んでみたい!」

「探索なのです!」

「すすむ」

いち早くちびつ子組が手を上げ進言してきた。残りのメンバーにも目を向けるとこちらも乗り気のようにだ。

「分かった。進んでみよう、その代わり無暗に壁を触らないように気を付けること」

それぞれの返事を聞いて主発する。

ここで気づいていたらあんなことにはならなかった。後に一番気を抜いていたのはオレ自身だと後悔するのをまだ知らない。

ミリアに「光り球」を出してもらい光源を確保して慎重に進んで行く。

暗い闇が続く通路を進んで行くと、程なくして扉が見えてきた。金属製の重厚感のある扉である。罨などもなさそうだが慎重に開けていく。

開けなはたれた扉の向こうは変わった部屋に繋がっていた。

鏡の部屋。部屋の中には大小形など様々な鏡が置いてあり天井や床にまである。

そんな中に一つだけ違うものが置いてある。巨大な時計だ。形は昔ながらの振り子がある置時計である。壊れているのかその振子は動いていない。

「すごい部屋ね……」

アリサが言葉をもらす。まったくそのとおりである。あまり趣味はよくないようだ。周りを見渡しながら扉をくぐり部屋に入——

「!?」

危機感ではない。だがまたしても違和感が襲う。

部屋に入って感じる違和感。

どこかで感じたことのあるこの空間。

クリアな視界の中で——

そこまで気づいた時にはすでに部屋に入っていた。

メニューを操作してレーダーやAR表記、場所を示す表記も元に戻す。

背後でみんなも部屋に入って来たのを感じる。

ハツとして後ろを振り向いた時には最後のルルも部屋に入っ

まったところだった。

カチ……カチ……

背後でそんな音がなる。

カチ……カチ……

背後には音が鳴るようなものはない。

カチ……カチ……カチ

本当にそうか？規則正しくなり続けるこれは……

カチ・カチ・カチ——

振り向いた先には大きな振子を規則正しく振り、時を刻み出した時計があつた。

「アリサ、今すぐみんなと部屋から出る」

だが進むべき針は逆に時を刻む。

「へ?」

時を戻すかのように逆に進む。

「緊急事態だ、逃げ」

時計を覗ながら、現在位置をもう一度確認する。

部屋中の鏡に時計の文字盤が映し出されている。そこには正常に時を刻んでいる姿があった。

「UNKNOWN」と表示されていた。

「ちよ、なにこれ！出られないんだけど!?!」

アリサたちが、いつの間にか閉まっていた扉を開けようと頑張っているようだがびくともしないようだ。

マップを確認すると「マップの存在しないエリアです」と表示された。前にゼンの影の中に囚われたときや、ユイカの空間に入った時と同じか。

空間転移やユニット配置を試すも効果がない。そこで空間が揺らいでいるのに気づく。

「ナナ、『キャツスル』発動！リミッター解除で使え！」

「イエス、マスター『キャツスル』モード起動」

揺らぎが大きくなってきている。それに共鳴するかのように鏡の中の文字盤が光り出す

「全員ナナの傍に集まれ！ルルも『フォートレス』を起動しろ」

「は、はい！」

オレも考えられる限りの防御魔法を施す。

「ちよつと!?!ほんとどうなってるの!?!」

「すまん！オレのミスだ、今ここは異空間の中だ」

みんながオレの近くに寄り身を固める。タマ、ポチなどはオレの体に張り付き耳もペタンとなっている。

「異空間?!ええー——」

アリサの叫びは途中でさいぎられてしまった。激しい閃光によって。

そんななかでオレは見た。何処かで見た姿を。そして聞いた彼女の声を。それを最後に全てが染まっていった。

私達の世界で楽しんで来て
また会いましょう私の・

異世界へ

◇サトウー視点◇

どれだけの時間がたったのか。

永遠だったかもしれない、一瞬だったのかもしれない。

気が付けば暗い闇が何処までも続いていた。

暗視スキルのお陰で直ぐに目がなれ部屋の全様が分かった。危険はないと判断して次にみんなの安否を確認する。今もおオレの体や服などを掴み、目を瞑り身を寄せあつて固まっている。

ステータス表示も確認して、怪我や状態異常などなく無事なことを確認してホツとする。ある一点だけ除けばいつもどおりな正常なステータスである。今はそれらを置いておきみんなに声をかけることにする。

「みんな、もう大丈夫だよ」

みんな恐る恐ると言つた感じに目を開けていく。だが誰もオレを離そうとしない。ポチ、タマなんかは耳がペタと伏せられていて弱々しいのがよくわかる。

「真っ暗で何も見えない…」

「サトウー…」

「ご主人様いるのです?」

「ん〜?」

「いったい何が…」

「何も見えません」

「う…」

やはり暗闇でみんな不安な様子だな。オレは自分の魔法を使い光を灯すことにする。確認が全部終わるまではみんなには魔法を使わせないほうがいだろう。

淡い光の球をいくつも作り出し部屋中に散りばめる。徐々に光を強めていき充分な明るさになるように調整する。

部屋が明るくなり、姿がハッキリしてくるとみんなもようやくホツとしたようだ。

「ご主人様！」

「ん〜」

「どうなったのいったい？」

ポチとタマが抱き付いてきたのを受け止め、アリサの疑問に答えるためにそちらを向く。この時抱き付いている二人の頭を撫でながらなのはご愛嬌である。怖がらせたからね。そして他のみんなの羨ましそうな視線は敢えてスルーの方向で。今は緊急事態だからね。

「まだわからない。でも直ぐに調べるからちよつと待ってくれ」

アリサの「調べられるの？」という視線に頷いておき、そのあとの「何か手伝えることは？」の視線には横に振り、休憩しているように伝えておく。

さて、さくさくと調べものをしますか。

◇アリサ視点◇

あれはいつたい何だったのだろうか。ご主人様はあの時、異空間といつていた。直ぐに光に包まれてしまい今に至る。ご主人様が言ったとおり体には怪我也違和感もない。ステータスはと表示させて固まる。

危うく叫びそうになるがご主人様の視線で思い止まる。あの顔は何か知ってるわね。

後で詳しく説明してもらってからね！そんなことを思いながら睨み返しておいた。

◇サトウー視点◇

アリサは気が付いたみたいだけど今は黙っててくれ。

視線を飛ばして止めてくれたが直ぐに睨まれた。大丈夫、後で説明するから。そんなことを思いながら頷いておく。

渋々といった感じで他の子達の元で休憩に戻っている。

さて、こちらにも調べものの続きにもどるとしますか。

「……異世界？」

今オレは、調べ終わったことをみんなに伝えているところだ。アリサ以外はキョトンとした顔でこちらを見ている。漫画だったら頭の上にハテナマークが飛び交っているだろう。

アリサは信じられない顔で驚いている。オレらからしたら2度目の異世界だ。こんな体験が二回もできるなんて幸運なんだか不幸なんだか。

「おそらく間違いない。オレ達がいるのは迷宮都市オラリオ。そこに広がる地下迷宮内だ。

でもオレはオラリオという都市を聞いたことがない。

アリサは知っているか？」

「う、ううん？知らないし、聞いたこともないわ」

それにログには「異世界に転移しました」とあるので間違いはないと思う。

それにしてもみんな混乱などはあるが、怖がったり不安がったりはしてないみたいだけど大丈夫なのか？

その事をみんなに効いてみると

「ご主人様がいるからよ」

「ご主人様がいるからです」

「ご主人様が一緒だから大丈夫なのです！」

「いっしょ」

「ご主人様がいらつしやいますから」

「ん、一緒」

「マスターが居ますから問題ありません」

ここまで信頼されると、嬉しさよりも責任感のほうが出てオレは苦笑いを浮かべそうになる。

そこは「無表情」^{ポーカーフェイス}スキルで抑え込み微笑んでおく。

そこまで話したところでタマとポチのお腹が鳴った。いろいろあつて疲れたのだろう。

話の続きはご飯を食べながらにするとしよう。みんなに伝えてご飯の準備に取り掛かった。

「ハンバーグ先生なのです！」

「ハンバーグ」

出来上がった料理を見てタマとポチが飛び上がりながら叫ぶ。筋力や俊敏値が高いせいで天井まで届きそうだ。前にも同じことがあった気がする。

他のみんなも喜んで席に着いている。タマとポチも座らせて号令をかけて食べ始める。

「やっぱりハンバーグ先生は最強なのです！」

「びびびみ〜♪」

「ん、美味し」

みんな好評のようだ。

ミーアはまだみんなと同じ肉々しいハンバーグは食べれないが、脂肪分を減らした豆腐いりハンバーグは食べれるようになった。前は肉を一切食べなかったからな。そのおかげでみんなと同じものが食べれるから良かった。仲間ハズレは嫌だからね。

「それで、あれに関しての説明をお願いしたいんだけど」

食後のお茶を飲んでいるとアリサが聞いてきた。やはり相当気になつてたようだ。

憶測の部分もあるが解りしだい教えていけばいいか。

オレは1つ頷きみんなを見渡しながら口を開く。

「率直に言うと、みんなのレベルが”1”になっている」

アリサ以外は首をかしげキョトンとしている。

アリサはやっぱりと言う感じでかなり落ち込んでいる。

そこにおずおずと手を上げ質問してくるルル。

「えっと、ご主人様。レベルが下がることってあるんでしょうか……」
この疑問はもつともだ。

原則一度上がったレベルが下がることはそうはない。

ヒカルやユイカは永い時のなかでレベルが下がっている。あとレベルドレインなんかもあるがそれとも違うだろう。

「あるにはある。でもそのどれとも違うようだ」

「じゃあ、何があるの?」

アリサの問に今現在で調べられたことを参考にしつつ答えることにする。

「おそらくオレ達が異世界にわたったことが原因だ」

「こつちに来たから下がったと言うこと?でもなんで?」

オレとアリサで話を進めている。その間他のみんなもいるのだがあまりわからずに困惑気味だ。タマとポチなんかは首をかしげすぎで頭同士をぶつけてしまった。ルル手当てお願いね。

「それに関してはこちらの世界の法則に影響された可能性がある」

「法則?」

「ああ。こつちの世界のレベルが大きく違っている」

「そんなに違うの?」

頷きながら先を話す。

「違う。そうだな、今オレ達が地下の50層付近にいるんだが前のダンジョンだとどれぐらいのレベルはほしい?」

「え?えと、50層でしょう。たしか私達が狩りをしていたのがそれぐらいだったから・・・45、安全にいくなら50はほしいわね」

「うん、それが妥当だろう。でもここは違う。今ダンジョン内で一番高いレベルでも”6”なんだ」

「え?・・・ええー?!”6”それで一番高いの!?!」

「ああ。もしかしたら外にはもっと高いレベルの者がいるかもしれないが今の最高は”6”だ。オレ達の世界と大分違っている。これがこつちの決まりなんだろう」

「じゃあ私達のレベルが下がったのはそれが影響してる?」

「それで間違いないと思う」

愕然とするアリサ。ちなみにタマとポチは半分夢の中だ。お腹一杯で難しい話を聞いてたら眠くもなるよね。

ルルに新しいお茶を頼みいれてもらう。

オレはストレージから作り置きしていたクッキーを取り出す。そこでタマとポチが目覚める。流石だね。

新しくいれてもらったお茶を飲みながらアリサを見る。

「でも下がっているのはレベルだけで、ステータスは変わってないからそこまで心配いらないぞ」

「ほえ？そ、そうなの？」

オレはメニューを操作して、ここに飛ばされる前に記録しておいたみんなのステータスを横目に見ながら頷く。

「ああ、みんなのステータスは記録していたからね。それと比べても変化はない。むしろ――」

オレはステータスをスクロールさせ称号やスキル欄を表示させながら

――増えてる」

オレはそう答えた。

時を同じくして――

一人の少年がダンジョンに潜るため目覚める

少女は次の階層への階段を下る

少年少女達と出会うのはもう少し先のことである。

迷宮へ

「ふえ・・・？え？」

まあそうなるよね。

今日だけでかなりの狼狽えっぷりをみたなと思いつつ苦笑いをうかべてしまう。

これ以上勿体ぶつても可哀想だ。

オレは大きく変わったものを伝えることにした。細かいのは追々ということだ。

みんなに話したことをまとめると、先にのべたステータスの数字の変化はない。その代わり称号やスキルが増えていたり称号にあったものがなぜかユニークスキルとして記されていた。

そのなかに――

＜『タビダツモノ旅行者』：これは全員に表れたのだ。おそらく異世界に転移したことで修得したものと考えられる。

＜『アラガウモノ不屈者』：アリサに表れたものだ。これはアリサがもともともつてるユニークスキルに影響されたものだと思う。

＜『イトムモノ戦闘士』：リザに表れたものだ。戦闘好きなりザらしいユニークスキルだ。

＜『ナシトゲルモノ勇敢者』：ポチに表れたものだ。これは称号：勇者からきているものようだ。

＜『シノブモノ隠密者』：タマに表れたものだ。忍者：タマにピッタリなユニークスキルだ。

＜『サバクモノ料理人』：ルルに表れたものだ。ルルにピッタリなユニークスキルだ。

＜『ミルモノ観察者』：ミーアに表れたものだ。これもミーアがもともともつてる精霊視からきているようだ。

＜『ツクラレシモノ魔造者』：ナナに表れたものだ。ナナ自身のホムンクルスからきているみたいだ。

——と、こんなものかな。

他にもあるがユニークスキルとして表れたものはこれだった。なかにはオレも待っているスキルもある。

いろいろと面白そうなスキルもある。料理人サブクモなんか正直ユニークスキルにするものなのか？性能が分からないからこれから楽しみだ。聞き終えたみんなは嬉しそうに各スキルにたいして話している。それをBGMにオレのスキル欄に目を向ける。いくつも増えたユニークスキルのなかのそれに目を止める。

▽『ハイエロフアージェント』
『神の代理人』

これはどう受けとればいだろう。誰の代理人なんだか。いや”神の”とあるから神なのは分かっているがどこの神……

——私はずっとあなたの側にいたのだから——

——私の……

——私達の世界を楽しんで来て——

そんな言葉と共に彼女のことを思い出す。転移の時に見た姿を。

いやまさかね……。でも、それしか考えられない。なぜこんなことを……。

——私達の世界を楽しんで来て——

まさかただ自分達の世界を自慢したいとか、楽しませたいだけとか言わないですよね……。

どこかで彼女が笑顔で頷いているのが見える気がするが、気のせいとして今後のことを決めないとね。

いまだ各自のスキルやこれからのことで話し合っているみんなのところへ向かった。

そういえば、みんなのステータスの経験値欄がなくなっていた。何気なく画面をタッチしたら次のような表示がでて引いた。

∨『対象者のステータス更新を実行しますか？』

∨『対象者のレベルアップを実行しますか？』

なに？育成ゲームの要素も追加したの？

今オレ達は部屋を出て通路を歩いているところだ。

通路の至るところに、光る鉱物や光苔などがあり思った以上に明るく通路の広さも大きい。

そんななかをオレが先頭にたち歩いて行く。次にミア・ポチと続き、真ん中にアリサ・ルル・ナナ、最後尾をリザ・タマとなる。

初めはリザやナナなどが反対していたが、初めての場所やモンスターなどが危ないから却下した。

とくにモンスターは前の世界とどれほど差があるかわからないしね。

初めの数回で検証して大丈夫そうならみんなにも参戦させるつもりだ。ステータスやスキルなどで身体にどう影響しているのかもみていきたい。

それと武器や防具、薬剤道具などの検証もしないといけない。やることは多いがサクサク消化していこう。

歩きながらストレージ内のポジションなどの回復薬や薬剤などを鑑定していく。

食材は先の食事の際に調べておいたので大丈夫だ。

鑑定の結果でも各薬品やポジションなどに問題なし。

ストレージ内の物が無くなっていることもなくいつもどうりだ。

それらを周りを探索しながら進めていく。

あらかた調べものが終わったところでレーダーに反応がでた。調べた結果ヴァルガング・ドラゴンとわかった。この先はかなり開けた場所にいるようだ。

全長は約10Mと大きくないが竜種なので油断は出来ない。しかし黒竜ヘイロンと比べてしまうと小さく思えてしまう。ヘイロンは

全長約100Mの巨体だったし約10倍だ。

みんなに声をかけて観戦してもらおうようにする。もしものために各防具の装置も起動させておく。装置『キャツスル』は正常に稼働しているようだ。これで生半可な攻撃ではびくともしないだろう。いや、さつき油断は出来ないといったところだろ、引き締めろオレ。

オレは自分自身に叱咤して気持ちを引き締めていく。

そしてオレの目の先に紅い竜が佇んでいた。

黒竜ヘイロンと同じ西洋の竜を思わせる姿をしている。こちらもスラツとした体に紅い竜鱗が煌めいている。

竜も気付いたのか顔を向けてきたので、こちらも始めるとしますか。

ご主人様が言っていたとおり竜が佇んでいた。

紅い美しい竜だ。頭から生えた立派な角、時おり見え隠れする純白に輝く牙、引き締まった腕先に伸びる爪。

とても脅威的なのだが、どうしてだろう？こう危機感が薄いというのか。これは黒竜ヘイロンを見たことがあるからそう感じるのかな？

これからのことを考えると逆にあの竜が哀れに想えてくるわ……。アリサは心のなかで小さく手を合わせるのだった。

さてまずは称号から試してみよう。

ちなみに言葉や意識の疎通は無理だった。

称号を『竜殺し』に変える。敵意のこもった視線を向けてくる。こちら辺は向こうと同じだな。次に称号を『竜族の天敵』に変えてみる。途端に竜の瞳に怯えが見える。

ここだけみると称号の効果は全く同じとみてよさそうだな。よし次に試してみよう。

称号を『勇者』に変え聖剣デュランダルを取り出す。

今までと変わらず持っている。試しに称号を外してみると拒絶されているのか手元から静電気のような痛みがくる。

これも変わらずか。再び称号を『勇者』に戻しながら少ししびれた手をふる。

竜のほうはオレから感じられていた威圧がなくなり再び目に先ほ
ど以上の敵意が浮かびあがり、翼を広げ威嚇の咆哮をあげる。

その声を聞きながらログを見るが何も無い。ただの咆哮だったか。
そんなことを考えながら次の行動に備える。

竜は広げていた翼を羽ばたかせ舞い上がりそこから突進してき
た。

デュランダルに魔力を流し強化しておく、そして受け止めるために
構える。

そこに竜の巨体が突っ込んで来た。スピードや体格差で後退せざる
おえないと思ったが受け止められてしまった。だが威力はやはり
あるらしく足元が少し陥没してしまった。デュランダルに欠けはな
し。

そこから竜は地面に足を着き牙や爪、尻尾などを使い攻撃をしかけ
てきた。そこでオレは剣でそれらの攻撃を弾き時には避けながら
デュランダルに流していた魔力を弱めていく。

最終的には魔力を流していない状態までもどして攻撃をさばいて
いく。そこまできても剣には欠けなどの傷みは見られない。

途中素手でも攻撃をさばいてみたがかすり傷ができる程度でそれ
も直ぐに治ることからそこまでの攻撃力がないことがわかった。

竜もうちがあかないとみたのかブレスを放ってきた。オレはそれ
に「フレキシブル・シールド自在盾」を展開し盾にする。5枚重ねて展開したのだが1枚目
すら突破できずに防ぎきってしまった。

だいたいの竜の強さも分かったところで次のことに取りかかる。

オレは「縮地」を使い竜の背後に周り尻尾を掴む。竜がオレを見
失っている間にデュランダルで切りつけてみた。

その時今までになかった感覚があった。不快感や危機感が有るわ
けでもないので何かのサポートかと思いきそれにしたがってみるこ
とにする。

デュランダルは抵抗すら感じずに尻尾の根元から切断できた。切

断面から竜血が吹き出てきてこのままだと服が汚れてしまうので「縮地」で今度は少し離れた所に移動する。

そこで竜が痛みのためか咆哮をあげ暴れだす。

それを見ながらこれまでのことをまとめていく。

竜の強さから自分自身の身体能力の変化や能力の変化などあらかた検証が終了した。おおよそのことは分かったし終らせるか。

オレは「空間固定」の魔法を使い竜の動きを止めすぐさま近づき首もとに聖剣を一閃させる。

「空間固定」の魔法で動けないため切つてずれることなく血が溢れ出す。立ったまま竜は絶命している。

任務完了、そんなことを思いながらみんなの所に向かった。

◇アリサ視点◇

ご主人様がこっちに近づいてくるのを見ながら想う。

やはり規格外すぎると、でもいつかその隣に立ってみせるからね！

私はそんなことを思いながらご主人様に手を振り声をかけるのだった。

この世界は

「ただいま」

「お帰りなのです！」

「おかり〜」

「・・・」

手を振りながらみんなの所に戻るとタマとポチが飛び付いてきたので受け止める。その後ミリアがいるのだが睨まないでくれ。避けるわけにもいかないだろ。

「さすがご主人様です」

「お帰りなさいませ」

「マスター、無事の帰還を祝福します」

「お帰り〜、やりすぎじゃない？」

ポチとタマに手をひかれながら戻る。

アリサが苦笑いしながら聞いてくるが無視しよう。そうかな、やりすぎかな？

まあ、まずはあれの解体を終らせるか。そしてこれからいろいろ確認していかないかね。

ワイワイと賑やかなみんなの顔を見ながらこれからどうしていいかと、思いを馳せながら皆で解体に向かった

〜2日後〜

少し時間が経ってるがあのあとのことを話していこうか。

149階層1

解体後はみんなにも戦闘をしてもらい前の世界とで身体の変化があるか、魔法や技などの確認もしてもらった。勿論装備や支援魔法は

一番性能がいいものを着けてだ。

結果――

『……』

「オーバーキルよね…」

――になってしまったので、始め以外は普段用の装備に変更している。どうやらこちら辺はこの子達には物足りないようだ。魔法や技なども俺と同様に問題なく発動していた。戦闘では問題はなかった。

事件はそのあとにおきた。

始めの戦闘が終わり5人で解体をしていると『えっ…』と言う3人の声が聞こえてきた。そちらを向くと声をだした3人（リザ・タマ・ポチ）がその手におそらく魔石を持って何も無い地面を見つめて固まっていた。

下を見ているから表情は見えないが耳と尻尾が3人の今の感情をよくあらわしている。解体をしていたもう1人のルルに視線を向けるが問題なく解体を終えている。

解体を見ていた他の子に聞いたところリザ達が魔石を取り出したら解体を進めていた物全て（いまだに固まっている3人が持っている魔石以外）が消えていったらしい。その後（元気付けるための）ご飯を食べてから検証。その結果俺とルル以外は全滅、3人と同様魔石を取り出すと消えていった。どこに消えるのかと魔力の流れを見ると地面からダンジョン内全体に広がっていった。そして別の場所で魔力が集り1つの固体として動き出した。ダンジョンから産まれたみたいだ。

解体は俺とルルが問題なくできることから共通点の『料理人』^{サブクモ}の影響だと思われるがまだこちらの常識が分かってないので保留、解体に関するは俺かルルがすることにきまった。

139階層――

「あー！あれだけ戦っているのに全然レベルが上がらない！」

キーと叫び声をあげるアリサ。

唯一俺以外でステータスが見れるアリサが、何回目かの戦闘が終わるなりステータスを見て吠えていた。

なんとなく予想はしていたが当たりだったようだ。

こちらの世界に来て直ぐにステータス欄に新しく項目が増えていてそれがアリサが嘆いているレベルに関することだったのだ。

まさに育成ゲームみたいにこちらの操作でステータスの更新やレベル上げができるようになっていた。そう言えば伝え忘れていたようだ。

今でも『むしろステータスが何一つ変わらないのはなんで?!』吠え続けているアリサに早く伝えに行くか。

「ごめん、伝え忘れてた」

「早く言いなさいよー!」

いやほんとごめん。

あとステータス更新やレベル上げはしていない。まだこちらの情報がないので上げすぎて目立つのも困るからね。今のままでも戦闘では問題はないし。

129階層ー

「どこの世界でもこういったことはなくならないな」

「まあ、しかたないわよ。これに関しては…」

今話してる俺とアリサの前には気絶して縛られた者達がいる。

なにかあったかと言うと襲撃（未済）された。

少し前から後をつけられていたんだけど、そのうちの一人が先回りをしてモンスタートレインをしてこっちに向かって来るのがリーダーに映った。

すぐさまみんなにことを伝え迎撃の指示をだす。モンスターとの

戦闘中に襲撃しようとしていた者達は俺とタマでサクツと気絶させ
といた。その時の忍者タマの動きや気配の消し方が前よりも熟練さ
れていたのもタマの持つ『隠密者』シノブモノの影響のようだ。

「どうするの？この人達」

「魔法で再度眠らせた後で異界アナザーワールドに入れておくよ。でもその前に…」

「?…なににするの?」

「せっかくだからこの世界のことを知ろうと思っただけ」

そこで俺は精神魔法の「洗脳ブレイン・ウォッシュ」を使う。横から「容赦ないわね

〜」と聞こえたが無視だ。襲われたんだから（未済）これくらいは許
容範囲だ。みんなも呼んで話を聞く。

そしてこの世界のことを知った。

『オラリオ』世界で唯一迷宮が存在する都市。今オレ達がいるのがそ
うらしい。

神々が多くここに居を構えている。どうやらこの世界では神は下
界に降臨しているようだ。

迷宮の真上にそびえ立つ50階建ての摩天楼施設が

『バベル』で迷宮からあふれ出るモンスター達を抑える「蓋」としての
役目と、階層ごとにいろいろな施設が備わって居るようだ。

レベルは最高はLv10と言われているらしいが、今の最高レベル
はLv7だそうだ。レベルアップは経験値を積むだけではできない
ようだ。

迷宮に挑む者は皆どこかしらの『ファミリア』に属していて、下界
に降りた神が恩恵と引き換えに人々を集めて組織するもので多くの
ファミリアがあるようだ。

その他にも一般的なことから少し裏側てきなことまで知ってそう
なことは全部聞き出した。

聞けることが終わったらオレ達のこと魔法で記憶から消して眠
らせた後異界アナザーワールドの中に放り込んでおく。

「あつちの世界も大概だったけど、こつちもすごいわね。まさか神様が普通にいるなんてね」

「あつちにも神はいたがなかなか会える存在ではなかったからな。それを考えるとたしかにこつちはすごいな」

「すごい〜?」

「すごいのです?」

「すごいです。我々が簡単に会える存在ではないですから」

「ん」

「肯定します」

「すごいですよ!」

タマとポチ以外は話を聞いて驚いているようだ。オレもこれにはなかなか驚かされた。

オレやアリサは日本の知識もあるためそれなりに神の名も知っている。そのためアリサほどではないがオレでも感動はした。あと気になったのが、あげられる神の名が地球上のなかで伝えられた者だけだったのだがそこはどういうことだろうか?

オレとアリサ以外は知らないようだ。

まあ、ただの偶然だろう。

ここは異世界なのだから、オレがもといた世界の神々が存在する世界もあるのだろう。

アリサが語るオレ達の世界の神話を聞きながらさきを進んでいった。

そして現在――

――119階層階段前――

「さて、ここを降りたら118階層で安全地帯があるようだけど、直ぐに次の階層に向かうと思う」

「あれま、そうなの?」

「ああ。話を聞いてファミリアでもなく、ファルナ恩恵も受けてないオレ達がかんなどころにいるのはまずいからね。あとここからは認識阻害の装備を付けといてね」

「あいゝ」

「はいなのです！」

「了解」

みんなが領き装備を整えたところで次の階層に向かって階段を上っていった。

本格始動前

ダンジョン中層第18階層、通称安全地帯と言われる階層である。安全地帯とあるが完全にモンスターが出ないわけでもない。稀にだがモンスターの襲撃もある。

だがそこは中層までこれる者達が集う場所である。モンスターの襲撃などものもしない。

ここには屋台や露店も建ち並ぶ。

食べ物から魔法薬、武器や防具などを扱う所や小さいが鍛冶屋などもありなかなか賑わっている。

だがここで売られているどの商品も割高、いやもはやボツタクリと言えるほど高い。それでも買う者は多い。

そんな商品が建ち並ぶある一角では商品売り買いする喧騒とは違う賑わいがあった。

そこにはロープで縛られた者達が一ヶ所にまとまって放置されていた。皆気絶しているのか眠っているのか身動きはない。その者達の首にはロープで吊るされた板がありそこにはこんなことが書かれていた。

—悪いことしました。反省中です—

このようなことが書かれているのがほとんどだが違うのもあり、『修行をやり直しなさい』『せくばい』『わるいことしたらだめなのです』などなど。

誰がやったのか、どこのファミリアがやったのかなどちよつとした騒ぎになったが次第にいつもの喧騒にもどっていった。

だがこの日を境に同じような者達が町のどこかで見つかることがあり、ダンジョン内での悪さは減っていくのだがそれはまだ先の話である。

「うつはく。どこもやっぱり高いわね。」

「そうだな。魔法薬一つで命が繋がると思うと仕方ないよ。まあそれでも高いけどね。」

そんな賑わっているところから少し離れた所を出口を目指して歩いている。

「そういえばあのままで大丈夫なの？たしか顔とか見られてたわよね？」

「ああ大丈夫だ。記憶操作でオレ達のことは覚えてないよ。」

アリスが襲って来た者達のことを聞いてきたので笑顔で答えた。少し複雑な顔して視線をそらしつつ「まあ、こっちも襲われたんだしそれぐらいは・・・」と小声で呟いていた。

記憶のほかに武器類も最低限を残し一緒に没収しておいた。これでこの世界の武器がどうゆうものかが色々調べられる。

「ご主人様、このまま次の階層に行かれるのですか？」

「うん。このまま向かうよ。買う物もないしね。」

「わかりました。」

「あいゝ」「はいなのです！」

ちなみに最後の二人はタマとポチなのだが、食べ物屋台から漂う香りにつられて突貫しそうになりただ今リザの両脇に抱えられている状態だ。

買う物がないとハッキリと言ったものだから3人はしょんぼりとしている。

「次の階層に付いて落ち着けるところでご飯にしようか。」

「わかりました。」

「あいゝ」「はいなのです！」

さつきと同じ返事だけど全く雰囲気が違う。今の感情を表すように2人の輝く笑顔と3人の尻尾をチラ見して先を歩く。

ほどなくして出口にたどり着きほぼ素通りするように第18階層^{安全地帯}を後にした。

―第17階層―

約束のご飯を食べた後、中層に来たのでここで「全マップ探査」を使いマップを更新させる。いつも思うが、「全マップ探査」と「マップ」の組み合わせは素晴らしい。イーजीモード万歳である。

階層ダンジョンなので3D表示にしてここからの階層を調べる。モンスターはミノタウロスやシルバーバツグや表示では1体しかないが小型の竜もいるようだ。

下の階層でもそうだったがモンスターにレベルは表示されない。この世界の常識なのだろう。

他の冒険者もかなりの数がいるようだ。

そういえば、このダンジョン内で一番レベルが高い冒険者達は今何処だろう。マーカーを付けていたので直ぐに見つかった。なのだ
が………

「おや？」

「ん？どつたの？」

「ん……いや、上の階層で戦闘中なんだが……」

「？普通でしょ」

たしかにここはダンジョン内戦闘はあたりまえだ。だがオレが気がかりなのは……

「モンスターの数がな・・・」

「どうかされたんですか?ご主人様」

「ん?」

片付けも終わったのかみんなが集まって来た。

「モンスターパレードにでもあったのかかなりの数のモンスターと戦闘中なんだ。しかも今も増え続けている。それと場所がわるいな。次の上の階層に続く階段が近くにあつてそこに逃げて行く固体が何体もいるな。」

「大変なのです!」

「ヘルプ?」

「あらま、大丈夫なの?」

「マスター救援準備終了です。」

すぐさま準備を終わらせてこちらの指示待ちだ。みんなさすがだね。

戦闘中の援護は大丈夫そうだ。モンスターはどんどん湧いて来てるが同じ速度で減つてもいる。それでもやや湧くいきおいのほうが早い。

問題は次の階層に逃げ出したモンスター達だ、こちらもかなりの数がいる。中層付近のモンスターが上層に向かったのだ。上層で活動する冒険者には危険だろう。

「いや、ここはオレが1人で行ってくるよ。みんなはここで待ってて。大丈夫だとは思うけど何かあつたら念話してくれ。」

そういつてオレは「オリジナルスキル：変装」で着替える。

「じゃあ、行ってくるよ。あとはよろしく。」

「行ってらっしゃいなのです!」

「ん」

「ガンバ〜」

「行ってらっしゃいませ」

「ご武運を、マスター」

「ご無事で」

「了解。行ってらっしゃい。頑張つてね、『勇者ナナシ』」

アリサの言葉を最後に転移を発動させた勇者ナナシ^オ。さて、こちらの世界でもナナシで頑張りますか。

その名は…

—8階層—

転移して8階層に来た。まずは今も湧き続けている元凶を止めようと思ったからだ。完全に止めなくとも数を減らせばどうにかできるだろう。

転移した場所は1つ手前の部屋だ。この先に大部屋がありそこが発生源だ。

閃駆で天上付近を一気に駆け抜ける。

この時に討ち漏らされたと見られるミノタウロスなどのモンスターはさくさくと切り伏せる。

ちなみに今使用中の武器は、ストレージから取り出した聖剣クラウドソラスだ。もちろんこれは偽物の方で本物は今もヒカルが持っている。

これはシガ王国に身代り用に造っていた物の完成形だ。材料から込められている回路まで全て同じに造っている。これで本物の9割程の性能まで近づけることができた。まだ本当の完成形ではないがオレが手を加えることは残っていない。出来ることは時間をかけて使うことだと想っている。

長い年月が経った物、想いが籠った物には力が宿る。どこかで聞いたことがあると思う。日本だと付喪神が分かりやすいかな？

精霊や神などがいる世界だし、それもありがた気長に経過を観ているかと思う。

でも完成したら聖剣クラウドソラスが2つになるのか…。その時はその時か、深く考えないようにしよう。

通路を抜け大部屋に出る。部屋と言ったものの表現的には小さめのドーム球場ほどかな？

天上付近まで上昇して眼下を見渡す。

広い荒野に岩などが転がっているだけで何も無い。いや今は他に2ついる。

方や武器や魔法を駆使し敵を葬っている。

方や圧倒的な数で敵に襲い掛かっている。

それらを見下ろしながら手に持つクラウソラスに魔力を注ぎ、並行して「誘導矢」の準備を進める。

作業を進めながら「聞き耳」スキルが下にいる冒険者の会話を拾ってきた。

「ちっ、雑魚のくせして数だけはいやがる！」

「ベート！口を動かさないうて手を動かさせ！手を！ほら、そっち言った！」

「殺ってるわ！そっちこそ手を動かさせや！」

「殺ってわよ！」

「！どわっ」「！きやつ」

「真面目にしないと当たり前ですよ」

「Yes, sir！」

「……」

「ギャアアア!!」

「…しかしなぜこの階層にミノタウロスが」

「わからない…今回の遠征で新種の魔物も出た、まだまだ僕達が知らない事や予測出来ない事もあるはずだ。これもその一つだろう」

かなり余裕そうだな。

止まりそうになつた作業を続ける。

眼下に映るモンスターは1種類のみ。牛頭に鍛え抜かれた肉体をもつ魔物『ミノタウルス』。冒険者が話していたけどなにやら予想外のトラブルみたいだ。

それにしてもかなりの数だな…。しかしミノタウルスカ、こつちではどうなんだろう？いやあの筋肉質だから硬すぎてダメかな…。牛系ならもつとまともな魔物だったら良かったのに、とても残念だ。

視界に映るミノタウルス全てと、今も沸き続けている壁にAR表示で小さな赤い丸が表示されている。何度見てもどこぞの空戦シミュレーターのターゲットマークのようだ。

——危機感知に反応があると思ったら壁？あつちの迷宮でも壁

から魔物が湧いていたけど…、いや違う。壁から産まれてる？

そう表現した方がしっくりくる光景かな。まあ先にこつちを終わらせないとね。

そんなことを考えながら準備が出来ていた魔法のトリガーを押す。それとともに、オレを中心として周囲に次々と短槍のような大きさの「魔法の矢」が現れる。その数120本。その光景だけ見れば夜空に輝く星のようだ。それも一瞬間の間、空気を切り裂く音を残して一斉に落ちた。

120本もの「魔法の矢」が的に向かって飛んで行く。次々と外さず正確に魔石だけを撃ち抜いていく。それはミノタウルスだけではなくダンジョンの壁にも突き刺さる。

魔石を撃ち抜かれたミノタウルスはサラサラと灰へと化わっていく。そしてあれだけ産まれていた壁には大穴が空いていてピタリと止まっていた。

後に残るのは無数の灰の小山にドロップアイテム、それと解らず立ち尽くす冒険者たちだ。

それはそうとクラウソラスいらなかったな。せつかく魔力も充填したのに。

——おや？一瞬目が合ったような

だが次の瞬間には他の冒険者たちに指示を出している。止まっていた冒険者もその声で動き出していた。

見た目は一番若く子供みたいな姿だがAR表示で種族小人族バルウムとありこのファミリアの団長のようだ。エルフみたいに見た目と歳が釣り合わないのだろう。まあそれでもエルフほどの年齢じゃないけど。

さて次はと、メニューを開きマップを見ようと操作する端に勢いよく掛けて行く者達が見えた。おや、と思い操作しながら下の会話を「聞き耳」スキルで拾う。

「残った者たちは、警戒しつつ怪我人の治療！それに直ぐに動けるように準備を！」

「はい！」

「…フィン、今のは……」

「…それは後だ、討ちもらしが上層に逃げている。先にアイズを向かわせたが心配だ…」

「確かにの、上層に中層クラスの魔物がいては普通の冒険者には荷が重い…」

急ぎマップを確認する。平面表示だと把握しにくいので3D表示に切り替え検索もかける。青点と赤点冒険者 ミノタウルスが表示されたマップを確認する。2体の赤点が1人の青点を追っている。また少し離れた所に青点がありその1人と2体を追っているようだ。

先頭の青点が左に曲がる。

——っ、まずい…！

転移を発動させ急ぎ向かう。

転移で姿を消すその瞬間を観つめる者がいた。

迷宮都市オラリオに住まう冒険者のなかでも第一級冒険者の一角、

「ロキ・ファミリア」団長 フィン・ディムナ。その二つ名は「勇者」プレイヤー

その口がわずかに動く。

「ん…？フィンどうかしたのかの」

「いや何でもない…。他の者は？」

「回復もある程度は済んでおる。いつでも行けるわい」

「分かった。これから上層に向かう！警戒を怠らず注意して行くぞ！」

「二はいー」

フィンたちが去って行く。

後に残るの無数の灰。これらも時間が立つと消え去り何も残らない。何もかもが元どおり——

——トクン…

なるはずだった。

何かの鼓動が聴こえた気がした。

でも何も変化はない。

気のせいだったのか。

静寂が広がるなか、ポツリとその名が小さく響いた。

奇しくもそれは先ほどフィンが呟いた名と同じであった。

その名は……………

『ナナシ』

時は再び動き出す。

それは新たな英雄譚の開幕である。